

## ヤコブの手紙4章 1-12 節 「兄弟の言い争い」

### 1A 体にある欲望 1-3

### 2A 神の敵 4-10

#### 1B 世の友 4-6

#### 2B へりくだり 7-10

### 3A 兄弟の悪口 11-12

## 本文

ヤコブの手紙 4 章を読みますが、再びヤコブの手紙の流れを読み取りながら 4 章に入りたいと思います。ヤコブの手紙は、エルサレムから散らされているユダヤ人信者に対して、牧会的配慮をもってヤコブが書いているものです。試練の中にあっても、それによって忍耐して、靈的に成熟した者になることができます。その試練の中で主に願う知恵は、主は惜しみなく与えてくださり、恵みが満ちます。そして貧しさについてヤコブは、たくさん取り扱っています。イエスご自身が、貧しき者への福音を説かれました。貧しさにある信仰の富について語りました。

しかし、ヤコブが懸念していたのは、その試練の中で誘惑があることです。信仰によって忍耐するのではなく、肉の欲望による誘惑に引かれていきます。しかし上から良き賜物を与える父なる神によって、その御言葉を純粹に受け入れることによって、私たちは汚れを捨て去ることができます。しかしクリスチャン特有の問題があります。御言葉を聞く生活を送るのですが、聞くだけで応答しない、つまり実践しないことです。実践しないので、むしろ何も聞いていない人とは異なる特有の問題が出てきます。それは、キリスト者のふりをして、実は私たちの心の問題がおざなりにされることです。

それで教会内における差別の問題をヤコブは取り上げました。貧しい人がいつの間にかないがしろにさせる姿をヤコブは厳しく叱責しました。私たちがいつの間にか、自分の気の合う人とだけ付き合い、教会に来ている新しい人々の、いろいろな意味での貧しさをないがしろにするなら、同じ罪を犯しています。そこでヤコブは本質的な問題を取り上げました。「言っているだけで、行っていない」信仰です。この問題を、私たちの信仰の父であるアブラハムを通して学びました。彼の信仰は、イサクを捧げるという行いによって現れました。私たちが信じていると「言っている」ことがその人が靈的であるかどうかを測るものさしではなく、その人がキリストの愛によって行っているかどうか大事なのです。

そして、御言葉が教えられることによって、起こってきたもう一つの問題がありました。それは、口による罪です。御言葉が教えられれば、それに応答して、ますますキリストの似姿に聖霊によって変えられるはずなのですが、むしろ言葉によって失敗します。人のことを悪く言います。問題は、

自分自身を御言葉によって吟味し、裁くのではなく、人々を教えようとしていることです。具体的にも、多くの人が教師になろうとしているという状況が、信者の間で起こっていたようです。

しかし、その知識のあるとされる者たちの間で行われていることは、争いでありました。一見、聖書の知識があり、高尚なことを話し、霊的に聞こえるのですが、それは「上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。」とヤコブは言います(3:15)。その見分けは、秩序の乱れです。「ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。(16 節)」そしてそれとは反対に、私たちが知恵の言葉話すことのできる決め手は、その心が純真かどうか、であります。心の中が純真で、そして平和があり、寛容、温順、それから憐れみとえこひいきがないこと、そして見せかけのないかどうか、ということです(17 節)。いつも、心の動機を吟味します。そこで 4 章に入ります。

### 1A 体にある欲望 1-3

4:1 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。

4 章 1-12 節、今日学ぶところは、兄弟間の争いについてです。ヤコブが取り上げているこの問題は、聖書にも何度も出てくる問題であり、現実の教会の中でも起こっている問題です。「詩篇 133:1 見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというあわせ、なんという楽しさであろう。」と歌っているはずなのに、例えばロトは叔父のアブラハムと争い、自分はゾドムの近くに天幕を張りました。アブシャロムは父ダビデに逆らい、国が分裂しました。弟子たちは、だれがイエス様の御座の右と左に着くことができるかと議論しました。

初代教会も、コリントの教会は仲間割れが起こっていました。そして、律法による正しさを目指したガラテヤの教会は、「互いにかみ合ったり、食い合ったり」していたとあります(5:15)。成熟していたかにみえるピリピにある教会も、実は競争が起こっていて、ユウオデヤとストケという女性奉仕者の中で一致がありませんでした(4:2)。ヤコブはこれらの問題を、ずばり「あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因」と明かしているのです。

ヤコブは、ここで「戦い」という言葉を使っています。「戦争」と訳してもよい言葉です。次 2 節で、「人殺し」という言葉も使っています。ヤコブは、イエス様の山上の垂訓を意識しています。私たちがたとえ人殺しをしていなくても、あいつは馬鹿だと言ったら、人殺しの訴状で最後の審判で裁かれなければいけないとイエス様は言われました。律法は、内にある態度を取り扱っていることをイエス様は話されました。

2001 年にアメリカで同時多発テロが起こった後で、日本のクリスチャンの間で戦争反対の声が上がりました。クリスチャンのインターネット掲示板で、アフガニスタンのテロリストにアメリカは兵

器で戦うのではなく花束を持っていきなさい、という意見投稿がありました。それを見て、未信者の人が腹を立てました。「自分の家族が殺されて、同じことが言えるのですか？赦して、訴訟もするなということが言えるのでしょうか。」そうです、私たちは外側にある平和を求めますが、まずは自分たちの間に平和と赦しがない状態を取り扱わないといけません。

4:2a あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。

私たちが争っている時に、その心の動機は「欲しがること」であるとしています。世の終わりに、全世界の軍隊がキリストに反抗して、世界戦争のために集まってきますが、彼らは「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。(詩篇 2:3)」と言います。つまり、神とキリストによって命令されていることを枷として、綱としてそれを制約であるとし、それから解き放たれようとするのです。私たちは争うとき、自分は正しいと思って主張しているのですが、このことが私たちの心に起こります。神の権威に服することをしない魂です。それは自己中心であり、自分を愛しており、その自我が膨張して争いを引き起します。

十戒の最後の戒めが「欲しがってはならない」であります。貪りが他の戒めの違反を引き起こします。人を殺すのも、自分の願っているように相手がしないからそうなります。物を盗むのは、自分が欲しいのに手に入れられないからです。姦淫も同じですね。親に反抗するのも、欲しいのが手に入れないのに親が止めさせるから、反抗するのです。貪りは、あらゆる悪の根であると言ってよいでしょう。

そして、「うらやんでも手に入れることができない」という点が大事です。私たちが欲しがる思いは、その欲を満たしてもさらに欲しいと願います。満足することを知りません。争いを引き起こす時、そこには満たされない思いがあります。パウロが若い牧者テモテに対して、エペソにある教会の争いの問題をどのように対処すればよいか、こう書いています。「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまつて真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。(1テモテ 6:3-6)」

敬虔を利得の手段とする、すなわち自分が何か得られると思つて、受けることだけを考えていると、どこかで必ずつまずき、心の中に争いの思いが生じます。自分が反対し、争う言葉を吐いたからと言って、憂さ晴らしになるかといえば決してそうではありません。世の中ではそうかもしれませんが、教会では惨めになり、淋しくなるだけでしょう。神によって新たに生まれた私たちの霊は、そのような手段によって満たされるようにされていないからです。

4:2b あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。4:3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

私たちが不満を持っている時に、根本的に癒されるのは祈りであります。ヤコブは、「願わないからだ」と言います。すでにヤコブはこう教えました。「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。(1:5)」ヨブ記を私たちは学んでいます。ヨブの魂は真実に、神に出会うことによって完全に満たされました。私たちの魂が満たされるのは、主から直接語りかけを受け、正される時です。自分が、これが欲しいと願っていたことは、意外にも自分の思いとは異なった形で、自分の思いを超えて満たされます。

祈りをするとは、神に服することであり、神の前にへりくだることですね。ですから、私たちは互いに祈り、その中で自分の至らなさを知り、そして神の恵みを受けることができます。しかし、これは私たちの内にある肉との戦いであり、肉は祈ることを拒みます。祈らないで、そのまま自分のしたいことを貫こうとします。祈りとは、この世にある悪霊との霊の戦いでもあり、また私たちの内にある肉との戦いでもあるのです。

願わないことによる罪は、ダビデが姦淫の罪、それから人殺しの罪を犯した後で主が語られたところに現れていると思います。預言者ナタンが、ダビデの罪を指摘してこう言いました。「さらに、あなたの主人の家を与え、あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し、イスラエルとユダの家も与えた。それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えたであろう。(2サムエル 12:8)」自分の性欲のために、神がもっと多くの妻を与えるのか？と思われるかもしれませんが、それが、主の意図されていたことではないのです。そうではなく、祈り求めれば、結婚という、主の定められた制度の中で、これまた神の授けられた性欲を用いることができるということです。悪魔は私たちに、「神はあなたが楽しめないように、意地悪しているのだ。」と言い含めます。そして神への信頼を捨てて、自分自身で性欲を満たすように仕向けるのです。貪りの罪は、神への不信から始まります。

けれども、願っても与えられないことがあります。それが、「自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うから」とあります。これは、祈りによって自分の肉と戦わないで、ただ祈り願ったいうことを保険にして自分の欲を満たそうとすることです。主の御心を求める祈りではなく、自分のしたいことを神に要求する祈りをします。そして神がその要求に従ってくれないと、神に対して怒るような態度です。神に対して不満足な態度は、そのまま教会の人々に対する不満へとつながります。主イエスは、「主なる神はただ独りであり、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、神を愛しなさい。」と命じられてから、その後すぐに、「自分自身のように、隣人を愛しなさい。」と言われました。神との関係は、人との関係の中に現われます。

## 2A 神の敵 4-10

### 1B 世の友 4-6

4:4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

ヤコブは、教会の中、キリスト者の中で争いがあることを、1-3 節では私たちの心の欲望、すなわち肉であるとしめました。そして今は、「世」の問題があるとします。私たちの間に秩序の乱れが起こるのは、キリスト者的な装いをしながら、世の価値観を取り込んでいるからです。世においては常識とされていることを、キリスト者の間ではあってはならないのです。どんなに尤もに見えても、世は、神の国に対抗するものであります。

初めに「貞操のない人たち」と、ヤコブはかなり厳しい言葉で語っています。愛する兄弟たち、という呼びかけが普通なのですが、言い争いをしている信者たちは、まるで世と同じではないかと厳しく叱責しているのです。それを、霊的な姦淫を犯していると責めているのです。イスラエル人はこの意味がよく分かりました。旧約聖書の中で、イスラエルはしばしば、夫に愛されている妻として神が呼ばれているからです。神との関係は、夫婦と同じ一対一の関係であり、他の神々を拝むことは姦淫しているのと同じことであると、主は言われます(例:エレミヤ 3:1-5)。

信者が、まさか神の敵になるとは考えていません。自分は神を信じているし、神に敵対しているとは考えません。けれども、神に加えて世も愛することは考えます。世のやり方も自分に取り入れることができると思っています。世を愛するというのは、世に愛着を抱いていると言い換えてよいでしょう。それで神を愛することもできると思います。しかし、それは決してできないのだとヤコブは言います。「世を愛することは神に敵する」と言いました。世か、神かのどちらかでしかないのです。このことは、使徒ヨハネも話しました。「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。(1ヨハネ 2:15)」

そして、ヤコブは世への愛着を「世の友」と言っています。アブラハムは「神の友」と呼ばれましたが、それはアブラハムが神と多くを語り、神と多くのものを分かち合ったからに他なりません。世の友とは、世と分かち合い、交わりをしているということです。これは必ずしも、テレビを見るな、趣味を持つなということではありません。それよりも、もっと微妙です。同じことをしていても、特にクリスチャンの活動と呼ばれている中において、いつの間にか世の楽しみとの混じり合いが起こるのです。友になるのが徐々に、であるように、世の友になるのも少しずつそうになっていきます。

例えば、男性信者が、女性に対して伝道するとします。事実、イエス様はサマリヤの女に伝道のために近づかれました。しかし、伝道と称しながら、実はその女性を恋愛の目で見ていたらどうでしょうか？または、福音宣教の働きをしているとします。その場所がとても居心地の良いところです。ここで生活ができたら楽しいと思って、そこに私は召されています、そこに行って宣教活動

をしたいのです、と言ったらどうでしょうか？あるいは、キリストを分かち合うのではなく、サークル活動のように仲良しになるために教会の交わりを期待したらどうでしょうか？「楽しむのが、どうしていけないのですか？神さまのことも行なうのに。」と思ったら、まさにヤコブが叱責している「あなたは世の友になっている」ということなのです。世を愛して、かつ神を愛することはできません。

イエス様は、「神の国とその義を第一に求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられます。」と言われました。一切、楽しみを持ってはいけないということではありません。そうではなく、それを神の国と混ぜ物をしてはいけないということです。例えば、神が加えて、伝道して信仰をもった相手と結婚に導かれることもあるかもしれません。そして宣教地で、すばらしい環境に恵まれることもあるし、そこの食事が美味しいということがあるでしょう。けれども、それらが条件ではなく、つまりそれらを愛するのではなく、ただ神に命じられていることのみを行なうことに集中します。

4:5 それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。

ここの訳は、下の欄にある別訳のほうが正しいと思います。「神が私たちのうちに住ませた御霊は、ねたみほどに(私たちを)慕い求めておられる。」御霊がねたむほどに慕い求めておられます。神との愛は男女の熾烈な恋愛のような、妬みと情熱を持った関係であります。私たちが誤った方向に走っていき、「いいよ、大丈夫ですよ！」というような偽りの優しさはありません。神が熱情をもってそのことを悲しみ、愛の憤りをもって私たちに対処されます。神の愛は、神も愛し、世も愛するような軽々しいものではなく、一途に神のみを愛するのです。神がかつてエルサレムに対して示された愛は、このようなものです。「わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、ひどい憤りでこれをねたむ。(ゼカリヤ 8:2)」

イエス様は、弟子たちは地の塩であり、塩気のない塩は捨てられると言われました。中途半端な愛は、神からだけでなく世からも捨てられます。私は神のためにいろいろ働いているのに、と思っても、世を愛しているのであれば、そのしていることを神はことごとく失敗させます。世の中に生きているほうが、よっぽど安心して楽しく暮らすことができるでしょう。教会に来れば、満たされず、あるいは自分の罪で惨めになるだけだし、世の中で楽しもうとしても罪意識が出て楽しむことができません。ある伝道者がこう言いました。「中途半端なクリスチャンは、銃撃戦でその真ん中に立っているようなものだ。世と神との戦いがあるのに、その真ん中に立っては世からも攻撃を受けるし、神の陣からも攻撃を受けます！」

私たちはしばしば、自分たちのしている働きの量で、神に奉仕していると思っていますが、量ではなく質です。キリストを愛するその深い愛があるところに、聖霊がその人を通して働かれて、大きな事を成し遂げるのです。だから、大事なものは心の動機です。主なる神を第一としているかなのです。

4:6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」

ここが、争いの元になっている肉の欲、またこの世への愛に対する解決です。神の恵みに戻ることで。キリストの十字架に示されている神の愛、そこで自分が罪人で、その罪のためにキリストが死んでくださったという愛、これに戻り、自分を神に服従させることが、心から溢れ出る貪りをやめさせ、世を愛してしまった者が世から離れさせる神の癒しであります。ここで、「さらに豊かな恵み」とあるように、すでに恵みは受けているのですが、さらに豊かに与えられるのだ、とヤコブは言っています。私たちは、恵みによって、信仰によって救われました。しかし、その恵みは一回限りのものではなく、むしろ恵みの上にさらに恵みを受けるものであります。使徒ヨハネは言いました。「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。(ヨハネ 1:16)」恵みは、無尽蔵に溢れ流れるものなのです。

ヤコブの手紙は、キリスト者が信仰を持った後に、成熟に向かうための知恵の書です。イエス・キリストという土台の上に、自分自身の行いで築き上げようとするならば、恵みではありません。ヤコブはこれを、「高ぶり」と呼んでいます。高ぶりとは、神ではないものによって自分を築き上げようとする欲望です。これを神は退けられます。そして、「へりくだり」は自分が全くなき者、どうしようもない者だという姿勢です。こうした者に恵みを神はお授けになります。「私は、これこれのことをしました」と祈ったパリサイ人ではなく、天に目を上げず、胸を叩いて、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」と言った取税人のほうです(ルカ 18:9-14)。キリスト者は、自分の行ないの積み上げで成り立つのではありません。へりくだりと、神への服従によって成り立つのです。徹底的に、圧倒的に恵みをもって臨んでくださり、惜しまず施してくださる神の前で自分の力や知恵を投げ捨てて、神に満たされることです。

## 2B へりくだり 7-10

7 節から 10 節までに、ヤコブは強い勧めを短い言葉で次々に行っていきます。一言で言うならば、へりくだって、神から恵みを受けるために悔い改めなさい、ということです。

4:7 ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

私たちに争いを引き起こす要因として、一つは私たちの内にある欲望があること、もう一つは、この世の友になることでした。そして三つ目は、悪魔です。悪魔は、何とかして神の平和を崩し、秩序の乱れをもたらそうと躍起になっています。3 章で読んだところをもう一度、読みましょう。「しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ない

があるからです。(3:14-16)」

悪魔が、高ぶりの罪を犯した張本人です。神の御座のそばで、神を礼拝するべく導く天使長であった明けの明星が、神のようになろうと高ぶったために墮落して、おるべき位置から落とされました。新しく信者になった人が監督になるべきではないという勧めを、パウロはテモテに行っていますが、「また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。(1テモテ 3:6)」と言いました。

私たちは、福音書において霊の戦いを見ることができ、またヤコブがここで私たちに勧めていることの実践を見ます。イエスご自身です。荒野で四十日の断食をされて後に、悪魔がイエス様に罪を犯すように誘惑しました。イエス様は、徹底的に神に従われました。そして、悪魔に抵抗しました。そして悪魔はイエス様から離れていきました。悪魔は、「あなたが神の子なのだから、そこにある石をパンに変えていいではないか。」と言います。イエスは神の口から出る言葉によって生きる、と言われました。そして、「あなたは神殿の頂から落ちても、聖書に天使が守ると言われているのだから、それをやってみなさい。」と言います。それをイエス様は、「主を試してはならない」とも書いてある、と行って抵抗されました。そして悪魔は、国の栄華を見せて、「私を拝むなら、これらすべてを差し上げます。」と言ったら、イエス様は、「主なる神だけを拝めとある。」と言って、抵抗されたのです。それで悪魔が出て行きました。

悪魔の唆しているのは、「結果を出すために、自分でやればいいではないか。」というものです。例えば、お腹が空いているなら、そしてあなたに力があるのだからパンに変えてもいいじゃないか、と誘っているのです。主の恵みを待ち望まず自分の力や知恵で事を運ばせ、自分の方法で神の事柄を成し遂げさせようとするのです。まさに、それがこの世の価値観ですし、自分の肉を刺激させる方法です。

そこで初めに必要な行為は、「神に従う」ことであります。私たちはヨブ記を学んでいます。ヨブは、サタンからの攻撃で、彼の魂に熾烈な戦いがありました。それは、彼にはあまりにも不条理なことも、自分中心にならず神中心になって、神に自分の魂を服従させることでした。彼自身がへりくだって、悔い改めたところで、サタンが手を引くようになります。そして、イエス様も十字架の苦しみを味わうことになる時、ゲッセマネの園で父なる神に自分を従わせる熾烈な戦いがありました。玉氏を神にゆだねるとき、その後どんなことがあっても悪魔は私たちに触れることさえできません。

そして次に、「悪魔に立ち向かいなさい」とあります。この立ち向かうとは、反対する、抵抗する、決して辞退しないということです。パウロはこれをローマ兵の武具に例えてこう言いました。「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰

の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のこぼを受け取りなさい。(エペソ 6:13-17)」

悪霊どもは、何とかして私たちを神の武具ではなく、人の肉の力によって引き寄せようとしています。神の知恵と力では、キリストの十字架の前では彼らは無力だからです。ですから堅固な砦であるキリストの外に出るように、私たちをおびき寄せます。霊の戦いの始まりは、これが霊の戦いであることを気づくことです。しばしば、病気の治癒は本人が病気であることを気づくことからだ、と言われますが、それと同じです。そして、敵に背を向けず立ち向かうことです。悪魔は何とかして、私たちの過去の失敗や罪を思い起こさせ、神の国に入ることはできないのだと強く暗示してみたり、ありとあらゆる方法でその火矢を打ってきます。それに抵抗するのです。そうすれば、約束があります。「悪魔は逃げ去る」のです。ですから、悪魔がいることに気づき、次に立ち向かい、そして逃げ去ったことを喜びます。

4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。

二つ目の勧めは、「神に近づきなさい、そうすれば神が近づいてくださる。」というものです。そうです、私たちはヘブル書の学びで、神に近づくことの恵みをじっくりと学びました。「そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。(ヘブル 10:22)」私たちが、神に不信を抱き、心を頑なにし、そして罪の惑わしを受けて、神から離れ世の友達になります。しかし悔い改めて、神に近づきます。そうすれば、神はご自分の用意されている、キリストの血と御霊の清めによる豊かな神の恵みが注がれるのです。

そして、皆さんがこのように聖書の学びに来るといって自体、礼拝に出てくると自体が神に近づくことです。自分を変えなければいけない、そのことは分かっているのです。けれども来る、そこには勇気とへりくだりが必要です。

それから三つ目に、「罪ある人たち。手を洗いよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」とあります。この二つの勧めは一組になっています。手を洗い清めることは、ユダヤ人はしばしば儀式として行っていました。外側の行いを改めなさい、ということです。今している罪を止めなさい、ということです。そして、「心を清めなさい」と命じています。外側だけでなく内側の態度も改めなさいということです。悔い改めとは、このように決断です。「もう罪を捨てます。」という強い意志です。

兄弟になった者に対して、「罪ある者」とヤコブが言っていますが、ここには妥協がありません。信者であっても、頑なに悔い改めないのであればそれは神に対する罪であり、罪人です。そして、「二心」とヤコブは呼んでいます。一方で神を愛し、もう一方で世を愛している姿です。これを一つ

にしなさい、ということです。ある注解書には、「二心」というのが、ヤコブがこの手紙全体で貫いている主題だろう、と言っています。聞いているだけで行わない。教会で熱心なようで、貧しい人を顧みない。口に出して言っているけれども、行いで信仰が見えない。そして、言葉においてある時は神を賛美しているのに、ある時は呪っている。ダビデが詩篇でこう祈りました。「私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。(86:11)」

4:9 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。

初めの「苦しみなさい」というのは、悩みなさいということです。ユダヤ人は、チクチクする粗布を身にまとして、自分を痛めつけつつ悔い改めていました。けれども、これはおかしいではないか、と反発するかもしれません。クリスチャンはいつも笑って、喜んでいるべきではないかと思う人もいでしょう。しかし、罪をないがしろにしたままで、喜ぶことも笑うこともできません。この喜びは世的な喜びであり、笑いも世的な笑いです。聖霊による喜びではありません。ヤコブは、イエス様の説教を思い出しているのでしょうか。「いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。(ルカ 6:25b)」私たちが罪に対して悲しむからこそ、後に持続する喜びが与えられます。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。(2コリント 7:10)」

4:10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。

こうして、神の恵みを受けるための悔い改めを見てきました。主の前でへりくだるとは、神に従う所から始まります。そして、神に近づきます。それから自分のしていることを清め、また心を清めます。その時に、罪のために悩み、悲しみ、泣き、憂わなければいけません。私たち男は、なかなか面子があってへりくだることができません。しかし、この弱くされた男こそが最も男らしいと神はみなされるのです。そして女は、自己憐憫のために泣くことは多いでしょう。しかし、先ほど引用したように悔い改めをもたらす悲しみは、悔いのない喜び、救いの喜びを取り戻すものであります。

そして約束は、主が高くしてくださいます。恵みを注いでくださり、神の子供として高められます。神の權威の下に服従できるか、または自分というものを残してクリスチャン生活をするのか、この二つに分かれます。使徒ペテロも、同じことを話しました。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。(1ペテロ 5:5-6)」

### **3A 兄弟の悪口 11-12**

4:11 兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟

をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。

ヤコブは、最も根本にあってキリスト者たちの問題を取り上げ、そのため「貞操のない人たち」「罪のある人」そして「二心の人たち」と呼びましたが、ここで「兄弟たち」と戻しています。神に近づき、罪を悔い改めることによって交わりが回復されたからです。争いの中で、当然ながら兄弟への悪口があります。これは、世においてはガス抜きのような作用を果たすと考えます。しかし、キリスト者の交わりの中ではこれほど傷つける者はありません。キリストの体に見事に亀裂を走らせませす。世を愛することの典型例であります。

そして、悪口を言うことはその兄弟を裁くことです。憂さ晴らしをしているだけだ、と私たちの肉は言いますが、いいえ、悪口を言うことによって自分が正しく、その兄弟が間違っていると判断しているのです。自分を正義の位置、裁判官の位置に置いているのです。さらに、ヤコブは「律法の悪口を言い、律法をさばいている」と言っています。ヤコブが話している律法とは、イエス様がまとめられた律法のことです。神を愛して、自分自身のように隣人を愛することです。特に後者、隣人を愛するという律法があり、それに対して悪口を言っているのです。自分が正しいと思っている中で、人を最も愛していない行為を平気でやっているということでもあります。

4:12 律法を定め、さばきを行う方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

再び権威の問題に戻っています。兄弟の悪口を言う、裁くということは、結局、自分自身を主ご自身の位置に置いていることになります。使徒パウロがこう言いました。「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。(ローマ 14:4)」主のみが、兄弟を裁くことができるからです。

結局、自分自身を神に従わせることができるのか、それともその制約から解き放とうとしているのか、という問題があります。高ぶりとへりくだりの話に戻ります。そして、私たちが兄弟のことで悩んでいる時、どうしてこんなにおかしいのかと不満に思っている時、そしてそれを口走っている時に、私たちは思い出しましょう。「神はへりくだる者に、恵みを豊かに与えられる。」ということ。十字架につけられたキリストこそ、私たちの知恵であります。自分自身が、十字架によって自分の罪が釘つけにされた、そのような愚かな者であり、罪人であるのだ。だから、ただすべては神の恵みから来ているのであり、私はこの神の愛を他者に分かち合うこと、そして仕えることに召されているのだ、と悟ることができます。